発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）

４月に開始した朝堂院朝庭の調査は、７月に夏の現場班に引き継がれました。７月までの調査で、朝庭広場一面を３～10cmほどの礫で覆うとともに、排水施設として暗渠を設け、整備していたことが明らかとなりました。７月以降は、藤原宮造営期の遺構を中心に調査を進めてきました。

藤原宮造営に関わる遺構としては、調査区中央やや西寄りを、南北に運河が貫流することが確かめられました。過去の調査成果を合わせると、運河の総延長は南北550m以上となります。この運河は宮の造営資材などを運搬したものとされていますが、今回の調査では、その運河から北東方向に支流がのびていることがわかりました。このような枝分かれした溝は、2008年度の第153次調査でも確認しており、造営資材を朝堂院の必要な場所に運び込むためのものと考えられます。

さらに運河の東側にあたる調査区の北東部では、沼状遺構を検出しました。今回の調査で、この遺構は南北44m・東西38m以上の非常に大規模なものとなることが判明しました。埋土からは、木材加工の際の削屑と考えられる大量の木屑が出土し、この遺構の周囲で造営資材の加工がおこなわれていたことが推測できます。　（都城発掘調査部　若杉 智宏）

なお，７月初めの調査工程で「大嘗宮」かとみていた遺構は、調査が平面検出などの精査へと進んで、遺構としては認められないことがわかりました。そこで７月１日の記者発表、および７月３日の現地説明会の発表内容を、11月18日の記者発表で訂正いたしました。　（都城発掘調査部長　深澤 芳樹）

飛鳥藤原第163次調査区全景(南から)

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第164次）

檜隈寺は、キトラ古墳から約600m北西の丘陵上に位置する寺院です。渡来系氏族の東漢氏の氏寺とされ、その寺跡には現在、東漢氏の祖先とされる阿知使主（あちのおみ）を祭神とする於美阿志（おみあし）神社が建っています。神社の境内には、今も７世紀後半に造営された講堂・金堂・西門の基壇の一部が残っており、塔跡には平安時代の十三重石塔が建っています。

今回の調査は、キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなうものです。調査区は２カ所にわたり、８月24日に開始しており、調査面積は約750㎡です。

今回の調査区は、於美阿志神社境内にある講堂基壇の約50m北に位置します。本来ならば、僧房など寺院の重要な建物を想定できる場所ですが、柱穴列や基壇など明確な建物跡は検出されませんでした。調査区のある場所は、講堂基壇から2.5mほど低い位置にあることから、後世に大規模な削平をうけていることが考えられます。

ただ、瓦を利用した暗渠（あんきょ）が１基、大規模な削平を免れて検出されました。調査区内には、丘陵部西側斜面にかけて北西方向の小さな谷が入り込んでおり、その谷頭部に暗渠を作り、谷底に向けて排水していたと考えられます。使用された瓦は、檜隈寺創建瓦で７世紀後半のものと考えられますが、谷の埋土から出土した遺物の年代は、それより後の10世紀前後のものが多く、暗渠が作られた時期を確定するには、さらなる検討が必要です。

また、調査区西側斜面では、奈良時代以降の大規模な整地を確認しました。奈良時代以降の檜隈寺は、平安時代の十三重石塔があるものの、不明な点が依然として多く残されているのが現状です。今回の調査でその一端を知る手がかりを得られればと期待しています。　（都城発掘調査部　石田 由紀子）

瓦を利用した暗渠（北から）